

実践『特別の教科 道徳』～「こうのとりのゆりかご」～

第11号

要約

本論文は、「特別の教科 道徳」の中学校3年生の実践である。「こうのとりのゆりかご」の「棄児」を預かる病院の是非について、モラルジレンマを用いた二項対立の「考え、議論する道徳」の実践を行った。社会的多様性や道徳的諸価値による多様性の受容など生徒自身が思索する中で自らの考えを深める場を作り考察させる実践とした。

キーワード 特別の教科 道徳 モラルジレンマ 「こうのとりのゆりかご」 棄児

I 実践の構想

1 本実践における多様性を理解する観点

本校の道徳科の実践も3年目を迎えた中学校3年生は、6月「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること“生命の尊さ”

(19) 生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえない生命を尊重すること。」をテーマとした実践を行った。集団の一員として、自己のふり返りと他者への思いやり、そして周りを見て行動できる“理性”の自覚、さまざまな意識づけをねらった『道徳科』の実践を通して、さらに『人間性』を見つめ直し高めて、『人間愛』の精神を育てることをめざした。中学校生活3年間の集大成として、自らを見つめ、他者を理解し、社会や世界に目を向けられる人格形成をはかった。そのために、3年生では、社会の一員としての行動を考える『世界観』を意識することを重点的な目標とした。

特に、この題材を選んだ理由としては、“生命の尊さ”を捉えるための社会的な問題について、議論を深めた。その議論を深めることによって、さらなる『生命の尊さ』について考える機会としたい。日頃の『生命軽視』の事件・事象事例を踏まえて、「自分だったらどう思う」という立場を明らかにしてさまざまな角度で議論することで、新たな視点に立った考え方を構築していくことをめざした。

さらに、そこに『多様性を理解する観点』を意識した実践をめざした。本校研究部より提案

されている『自己と他者の違いを価値あるものとして生かし、よりよい共生のあり方を創り続ける生徒』という『子ども像』を意識して、ある課題に対して、「モラルジレンマ」という活動形態を元に、生徒たちの中での自己と他者との違いを認識し、価値あるものとして生かし、

よりよい共生のあり方を考え、創り続けようとする生徒の思考、活動に結び付けることをねらいとした。3年間の『道徳科』の蓄積、さまざまな教科での活動の累積、教科横断的な思考の育み、など多くの授業/活動実践を踏まえた本校であるからこそ、この活動につながるのではないかと考え実践を行った。

2 実施時期と対象生徒及び単元

実践時期は年回を通して、2回。連携授業研究会と国語科の授業の中で行った。実践対象は国立中学校の第3学年159名。道徳科としては年間とおしてさまざまな単元を特別活動や行事を通して実践した。

今年度は、1学期、道徳の活動項目でもある、C-「主として集団や社会との関わりに関すること」を中心に、さまざまな目標を持った活動を行った。3年生は特に『運動会』『文化研究発表会/合唱コンクール』（特別活動領域）という2大行事を控え、紆余曲折を経てクラスがまとまっていく時期であった。また、個人の『自己肯定感』や『自尊感情』から個の意見がそれぞれぶつかる時期でもある。本実践では、社会性や公共心、公德心などにふれる中で、『生命

の尊さ』(道徳領域)活動(※実践)につなげることをねらいとした。そこで、『生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重する』【D-(19)】ことに気づかせることをめざした。

中学校3年生の道徳性の発達でも、自らのことを中心に考える自己本意志向(『モラルジレンマ』では「道具的-互惠主義」と呼ぶ)の強い時期から、思いやり志向へと変容を果たす時期に当たる。これは、本学年の実態と同じであり、特に男女差の意識の違いともいえる。本校の生徒は同時期の生徒に比べて家庭的にも経済的にも恵まれた生徒が多く、また、幼稚園、小学校でも附属学校で育った生徒が過半数を占める。同じような環境の生徒が多い分、さまざまな環境の同世代の生徒がいることを本当に理解することが難しい。自分の置かれた環境が

『当たり前』と思わずに、さまざまな環境で生まれる『命』があり、その『命』の在り方の一つとして今回の資料を読むことをねらいとした。日々の生活の中で『他者意識』を求めても、どうしても理解に限界があり、俯瞰した物事の見方を早急に身につけることは難しい。今回の実践を通して、社会的な問題の中にある『生命の尊さ』を考えつつ、今置かれている自分の立場、そのまわりにある環境や社会全体に視野を広げていくことをねらいとした。そのきっかけとして今回の『モラルジレンマ』の授業を実践したい。

3 実践の目標

生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重する意味を考える。【D-(19)】「道徳科」

4 指導計画

実施予定日	活動名	主な活動内容	領域
4月9日	学活① 前期係委員会決め	よりよい学校生活・集団生活の充実 C-(15)① 各教室	学活の時間
4月9日	総合 卒業研究①	真理の探究、創造 A-(5)① 各教科教室	総合の時間
4月11日	総合① 校外学習関係①	よりよい学校生活・集団生活の充実 C-(15)② 各教室	総合の時間
4月13日	道徳① 校外学習関係②	よりよい学校生活・集団生活の充実 C-(15)③ 各教室	道徳の時間
4月18日	総合② 進路学習①	進路資料説明・学年集会	総合の時間
4月27日	道徳② 校外学習関係③	よりよい学校生活・集団生活の充実 C-(15)⑥ 各教室	道徳の時間
5月1・2日	個人面談	向上心・個性の伸長 A-(3)① 各教室	道徳の時間
5月9日	総合③ 校外学習関係④	よりよい学校生活・集団生活の充実 C-(15)⑦ 各教室	総合の時間
5月11日	道徳③ 校外学習関係⑤	よりよい学校生活・集団生活の充実 C-(15)⑧ 各教室	道徳の時間
5月15-17日	総合 校外学習(本番)	よりよい学校生活・集団生活の充実 C-(15)⑨奈良県京都府	総合の時間
5月25日	道徳④ 校外学習を振り返って	真理の探究、創造 A-(5)② 学年集会 各教室	道徳の時間
6月1日	道徳⑤ 進路学習②進路とは何か	学年集会・各教室	道徳の時間
6月6日	総合④ 卒業研究②	真理の探究、創造 A-(5)③ 各教科教室	総合の時間
6月8日	道徳⑥ 運動会選手決め	よりよい学校生活・集団生活の充実 C-(15)⑩ 各教室	道徳の時間
6月13日	総合⑤ 卒業研究③	真理の探究、創造 A-(5)④ 各教科教室	総合の時間
6月15日	道徳⑦ 進路学習③自分を見つめる	各教室	道徳の時間
6月15日	道徳 こうのとりのゆりかご	生命の尊さ D-(19) 「こうのとりのゆりかご」←連携授業研究会	道徳の時間
6月22日	道徳⑧ 進路学習④これからの進路への取り組み1	学年集会・各教室	道徳の時間
6月下旬	第1回志望校調査	各教室	
7月6日	道徳⑨ 進路学習⑤これからの進路への取り組み2	学年集会・各教室	道徳の時間
7月13日	道徳⑩ 進路学習⑥高校調べ	各教室	道徳の時間
7月下旬	志望校についての面談	各教室	夏期休業中

【指導案】

過程 時間	●主な学習活動 ⇒予想される生徒の反応 主な発問	・指導上の留意点と◆評価 ○補助発問																
導入 3分 交流 (話し合 い) 前半 10分	<p>●1, 主題や資料内容に関わることを発表し合う。</p> <p>●2, 『このとりのゆりかご』の 資料 を読んで、登場人物の置かれた状況を理解する。 (状況確認)</p> <p>●3, 主人公の当為を判断し、その理由を考える。 (第1次の判断/理由づけ)</p>	<p>・導入部分では、取り扱う主題や内容など、読み取りの手助けとなるように工夫する。</p> <p>・読み取りに誤りがないように、登場人物、問題の背景、葛藤の内容や道徳的な価値などをしっかり共通理解させることを主眼とする。</p> <p>○場面毎に句切って読むなどの方法を適宜行いたい。</p> <p>○共通理解の徹底のために小集団討議(バズセッション)を活用することも効果的である。</p> <p>・主人公は葛藤場面でどうすべきかを、その理由とともにワークシートに記入させる。</p>																
交流 (話し合 い) 後半 30分	<p>『このとりのゆりかご』の設置について、どうすべきでしょうか。</p> <p>●4, 判断/理由づけの確認を行う。</p> <p>●5, 判断毎の集団で、判断の理由づけに関する意見交換を行うとともに、反対側の立場に対する質問をまとめる。 (意見の分類・整理)</p> <p>●6, 相手側に質問を行いつつ、自己の意見の明確化を図る。 モラルディスカッション1 (質問・疑問・意見)</p> <p>●7, 焦点化した問題を話し合う。 モラルディスカッション2 (討論内容の焦点化)</p>	<p>・ワークシートを用いて、自分の判断/理由づけを確認させる。</p> <p>・判断毎の集団に分け自分たちの判断の根拠に関する意見交換を行わせる。また、反対側の立場への質問をまとめさせる。自分と異なるいろいろな意見があることに気づかせるだけでなくなぜかと考える機会になる。</p> <p>・自分の書いた意見や疑問に基づいて話し合いをしていく。そのとき意見の対立点や一致点を明確にする。</p> <p>・6, で出た問題点や教師が準備した問題点に関して、焦点化した話し合いを行わせる。</p> <p>○教師は、生徒の考えの至らないところや矛盾点に気づかせるよう支援を行う。</p> <p>○小集団とクラス全体によるディスカッションを通して、いろいろな意見を考慮したより広い視野に立った意見に練り上げさせる。</p> <p>・双方の立場の依拠する理由づけを発表させる。ただし互いにその根拠を尊重し合い学び合うよう支援する。</p>																
振り返り 見直し 7分	<p>●8, 最終の判断・理由づけを行う (最終の判断・理由づけ)</p> <p>【自分のふり返りのためのワークシートに記入する】</p> <p>生徒の結論【板書より】</p> <p>*前半⇔後半 立場の変更</p> <table border="1" data-bbox="263 1848 726 2038"> <tr> <td></td> <td>はい</td> <td>いいえ</td> <td>迷う</td> </tr> <tr> <td>男子</td> <td>12⇔8</td> <td>7⇔10</td> <td>0⇔1</td> </tr> <tr> <td>女子</td> <td>18⇔16</td> <td>2⇔2</td> <td>0⇔2</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>30⇔24</td> <td>9⇔12</td> <td>0⇔3</td> </tr> </table>		はい	いいえ	迷う	男子	12⇔8	7⇔10	0⇔1	女子	18⇔16	2⇔2	0⇔2	合計	30⇔24	9⇔12	0⇔3	<p>○教師は、生徒の考えの至らないところや矛盾点に気づかせるよう支援を行う。</p> <p>○小集団とクラス全体によるディスカッションを通して、いろいろな意見を考慮したより広い視野に立った意見に練り上げさせる。</p> <p>・双方の立場の依拠する理由づけを発表させる。ただし互いにその根拠を尊重し合い学び合うよう支援する。</p> <p>・自己の最終判断と理由づけをワークシートに記入させる。</p> <p>・生徒の意見をもとに、本時の主題を教師がまとめて、オープンエンドで終了する。</p> <p>◆活動を通して、『このとりのゆりかご』などの視点で討論し、「最も弱い立場にある胎児・乳児の生命を真に尊重する解くことの深い意味を、「このとりのゆりかご」の是非を通して考えさせ、さまざまな立場・観点から生命や人間の尊厳を見いだしていこうとする心情」について考えることができる。</p>
	はい	いいえ	迷う															
男子	12⇔8	7⇔10	0⇔1															
女子	18⇔16	2⇔2	0⇔2															
合計	30⇔24	9⇔12	0⇔3															

テーマ具現に向けて前出表のように活動を計画した。道徳科の時間を要に、学級活動・総合的な学習の時間(以下『総合の時間』)を関連させて計画を立てている。(平成30年度3学年1学期分)(1学期 全20時間 本時 17/20)

5 実践における指導の過程と子どもの活動状況

(1) 本時の目標

・1年生、2年生の全ての活動を踏まえて、最も弱い立場にある胎児・乳児の生命を真に尊重するということの深い意味を、「こうのとりのゆりかご」の是非を通して考えさせ、さまざまな立場・観点から生命や人間の尊厳を見いだしていこうとする。【D-19】¹⁾

・実際の授業実践の中で、人間尊重の精神のあり方について、『モラルジレンマ』を通して自己の『内面』に迫るために、他者との議論を通して考えさせるという「学びを深める」場を設定した。

・課題はオープンエンドであり、価値葛藤をめざしており、自己中心的で、規範意識や自制心が十分に発達していない中学生の変容をめざした。

(2) 本時の展開

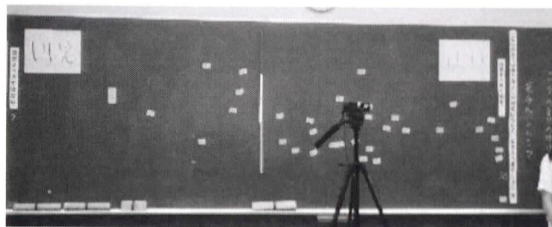
(1学期 全20時間 本時 17/20)

【指導案参照】

II 実践の実際

今回の授業実践の中で生徒自身社会的な問題をより真剣に考える場面が多く見られた。最初のワークシートの「書き込みカード」からそれぞれの立場に対して、自分たちの考えを重ねて思考していく過程が見られた。特に1年生のころは、自分の意見を押し通そうして感情的に意見を言ってしまったり、相手の意見にかぶせて発言してしまったり、相手を論破しようとしてかえって情に流されてしまう場面が見られ

た。しかし、今回は、相手の意見にしっかりと耳を傾け、自分の意見を発表するときに言葉を慎重に選ぶ姿が見られた。また、テーマによるのか、女子生徒が「設置すべきである」派が多かった。しかし、全体的に「設置すべきではない」派が圧倒的少数派だったのにもかかわらず、論理的に自分たちの意見を発表していった。今回は活動の最初と最後に自分たちの名札を黒板に貼り、可視化した。前半と後半で議論を経て自分たちの立場が変わることも許容とした。今までの2回の「モラルジレンマ」の実践、1年と2年の時と比べて、一番議論の前後で意見が動いた。お互いの意見を聞き合う文化が育まれたこと、非常に思考が深まる議題であったこと、お互いを尊重する姿勢が育っていることなど、多角的な要因が考えられる。ここに「多様性を理解する視点」を見て取ることができるのではないかと考えた。【板書の写真】



「『こうのとりのゆりかご』は設置すべきか、それとも設置すべきではないのか」

(前半) 左側「いいえ」=設置すべきではない 9名 右側「はい」=設置すべきである 30名 迷っている 0名

板書の名札の位置から生徒たちの考えが明確に分かる部分があった。まず、「設置すべきである」=「はい」が30名おり、「設置すべきではない」=「いいえ」が9名、中心線に置いた、「迷っている」は最初だれもいなかった。その中でも中心線との距離が非常に顕著であった。前回のモラルジレンマは、黒板の枠をはみ出るほど極端な意見の生徒が複数いた。今回は、中心線までの思い思いの場所に自分の名札を置く生徒が多く見られた。また、自分たちの意見を述べながらも、それぞれの立場に立った意見を述べる相手側の発言にも非常に同調的に傾聴している様子が見られた。これは、モラ

ルジレンマを挟んで、意見が動く要因となった。1時間の実践を経て意見が動くと言うことは、それだけ『学びの場』としての今回の活動が適切であったことの一つの要因であったと考えられる。最終的には、「設置すべきである」が24名、「設置すべきではない」が12名、「迷っている」が3名となった。【板書の写真参照】

今回の多様性を理解する視点において、モラルジレンマだからこそこできる「立場＝意見が変わった（移った）生徒」の意見に注目したい。

「設置すべきである」⇔「設置すべきではない」

3名

もちろん、虐待や育てられない状況下において、仕方なく預けることもでき死者を減らすことができるが、設置したところで、それに頼る人が増え、子どもたちが自分の親が分からないような状況も増え、その子どもを育てることができる「このとりのゆりかご」の人たちも幼児が増えれば大変になる。そもそも預けることが児童を捨てていることになるので、「このとりのゆりかご」を使ったところで、児童放棄が増えるだけになってしまう。（男子）

生徒の“迷い”がそのまま見て取れる。

「設置すべきである」⇔「迷っている」 3名

なるべく設置してほしい。なぜなら、親の無責任な行動のせいで何の罪もない子どもたちが捨てられ、殺されてしまうというのは赤ちゃんの人間としての生きる権利を潰すことになると思うから。しかし、設置することで、「産んで無理だったら預ければいいや」と軽い気持ちで出産に臨み、どんどん捨て子が増えてしまうのも問題とも考えたので、中間の意見だ。個人的には、なるべく設置してほしいので「このとりのゆりかご」で、手続きのときに子どもの将来のことなど罪悪感を持ってもらうことをしたり、よびかけたり、手続きを面倒くさくして（何枚も書く）本当に無理な人にだけ役立つようにすれば設置できると思った。（女子）

討論（モラルディスカッション）なので、自分の最初の意見と、討論中、討論後の意見が異なる

のは当たり前の姿だが、一定の結論を出すタイミングでも、自らの意見が揺れている生徒のワークシートである。「このとりのゆりかご」を設置するか否か、その社会的な問題点、自分たちの身近な出来事というところまで鑑みて結論を考えると、「迷ってしまう」というまさに、思考の深まり、『ジレンマ』（葛藤）が見られた例である。

また、この意見が変わるという行動そのものが、『多様性を理解し』『受け入れた』瞬間ということができるのではないか。自分と異なる価値観、他者の意見を受け入れ、自分の主張を変えろということ、他者との違いを認識した上で、よりよいものを創り出そうとする意識の表れと考えられる。また、『モラルジレンマ』という活動方法だからこそこ、そういった『意見の変化』を受容的に受け入れ、さらに変化、昇華していく過程を具体的に可視化することができたのではないか。

また、この生徒の心の表出は一朝一夕にできるわけではない。『特別の教科 道徳』の実践を重ねて3年目で有り、一昨年度（1年生時）昨年度（2年生時）も、『モラルジレンマ』の実践を行った。その中で、近未来のわが身の上の出来事という捉え方をすることができるようになった生徒もいた。

- ・子どもを捨てるのが安易になってしまし、責任のない親たちの溜まり場となること、匿名で預けられることが怖い。
- ・病院を経営していく立場として考えると、子どもを預かって届けている間に、一人の命を救うことができるかも知れない。
- ・子どもには罪はないが、母親には罪がある。国が解決すべき。

〔感想〕難しい問題だと思いました。自分がそのように子どもを産んでしまった時どうしたらいいのだろう…。と考えて怖くなりました。責任のある母親になりたいです。（女子）

Ⅲ 考察

本実践の『このとりのゆりかご』は『モラルジレンマ』という活動を元に行った。『多様性を理解する観点』という視点を持って考察すると、大きく分けて、三つにまとめられる。

一つ目は、自らが置かれている立場・環境と距離がある『課題』を客観的に捉えて論理的に思考することができたという点である。

『道徳科』の3年間の蓄積がある部分ではあるが、『このとりのゆりかご』に関わる対象や問題となる事象が、自分の近未来であったり、同世代ではあるが身近にいない事象だったことが大切な部分であった。『感情的』にならずに、いかに論理的に物事を考えて分析し、自分の立場を決められたかというところが大切なスタートラインであった。「このとりのゆりかご」を設置する必要を感じる立場も、反対する立場も、長期的な視点で、あるいは社会的な視点で考える必要があったことが、それぞれの立場を明確にした議論としてたいへん意義を持った。それを踏まえた上で、社会的に存在する『多様性』に思いを致す場面がたくさんあった。自分の立場を明示するために、どんな立場の人たちについて考える必要性、可能性があるのかというのを自分たちが意見を発表する度ごとに言う必要があった。

具体的には、「設置すべきである」派は、

どんな人でも生きる権利があり、大人の都合で殺される必要はないからである。確かに設置することで親も子も傷つくことはあるかもしれない。でも「生きる」ということが一番重要であり、そのリスクを負ってまで話し合うことはない。

という意見を持ちながら持論を述べている。

ただ、

この問題はすぐに解決できることではない。よって、一時的だとしてもいくつかの命は救えると思うので、設置すべきだと思う。

と実際の社会的価値で「即解決」という結論が出ないことを踏まえた上で「命は救える」という立場に基づいた結論を述べている。

また、「設置すべきではない」派は、

親の育児放棄という点を社会全体が容認し、ますます状況は悪化してしまうのではないかと

という、立場に重きを置いて意見を述べている。

このような状況は良くないことであるので少しずつではあるけれど社会全体が子どもを大切に
する方向にしていくなために行政が対策をしていくべきだ。

と、具体的な提案も行っている。

議論をする中で、さまざまな『立場』を考えることが『多様な』立場の人たちを考える機会になったといえる。これは、より客観的な立場だからこそのことである。自分に惹きつけて考えてしまう議題であると一方方向の自分からの意見や立場しか考えることができず『多様な』立場に思いが至らなかった可能性もある。

二つ目は、「設置すべき派」「設置すべきではない派」ともに、数の論理で決定する議論とならなかった点である。

病院というものは体の悪い人を直すための場所であり、確かに産婦人科で子どもの育児に対することはしているけれど育児放棄に関する全てを行う必要はない。「コウノトリのゆりかご」は匿名なので子どもに親が分からなくなってしまうという欠点があり、課題は山積みであるのでそれなら全て国が主導した方がよいのではないかと

確かに、命を助けるということ自体を否定しているわけではないが、全てが病院で行われるべきではなく、行政や国が主導で行うことだという明確な提案を行っている。

これは、話し合っている中でもよく述べられていたことで、感情的に「命は大切」「守るべきもの」という意見を尊重する「設置すべき」派よりも、一時的に守った命よりも生んだ親の問題であり社会全体の問題であり、システムとして考えていくべきだという意見を主張する「設置すべきではない」派の方が、論理的に論

を展開していた。人数的には、最終的には2対1の割合で「設置すべき」派の方が多いたのだが、討論のときになかなか意見が出にくかったのも、「設置すべき」派の方だった。

この部分は「道徳的諸価値」と「社会的価値」とのジレンマで見られる特性であり、今回の課題の設定が適切だったことを物語っている。

三つ目は、モラルジレンマという活動そのものが「多様性を理解する観点」を多く含んだものであるという点である。議論を重ねて、ディベートのように二項対立で正誤を問うような議論や、バズセッションやワールドカフェのように拡散や収束といった結論の方向性が定まっているものの議論と異なった仕掛けとした。生徒はたとえ「道徳科」でも、教師側が望む答えを導こうとしがちであるけれども、「モラルジレンマ」という活動自体、「葛藤」という場が設定されており、自分たちの意見や立場がどちらとも言えるという前提に成り立った議論を構築した。そのことで、「どちらの立場もある」という前提のものに、自分だったらどうするか、どんな立場の人たちをより幅広く考えて意見を言えるか、といったことまで考えることができていた。これは、議論が終わった後の休み時間でも、自分の立場が明確にできなかったと自戒している生徒がいたり、反対意見に憤りを感じながら、もっと議論をしたいと言っていた生徒がいたりしたことで明確な結論となった。「道徳科」という授業の中ではあるが、さまざまな立場を理解しようとする中で「多様性を理解する観点」を持つ機会となった実践だといえる。

IV 実践のまとめ

本校研究部より提案されている『自己と他者の違いを価値あるものとして生かし、よりよい共生のあり方を創り続ける生徒』という『子ども像』を意識して、「こうのとりのゆりかご」という課題で「モラルジレンマ」という活動形態で授業実践を行った。

生徒たちの中での自己と他者との違いを認識し、価値あるものとして生かし、よりよい共生のあり方を考え、創り続けようとする生徒の思考・活動に結び付けることをねらいとした。ただ、実践をしてみて課題もみつかった。

生徒たちが自分たちの問題としてどこまで深められたのか。竹早中学校の生徒たちはとても恵まれている環境の生徒が多く、「望まれない妊娠・出産」という言葉がどれだけ自分たちの身の上の問題として考えることができたのが疑問である。また、「正義」感を振りかざすあまり、正論をぶつけ合う傾向もあるように思う。本当に、家庭的に恵まれない環境で育った生徒たちを交えた教室で、ここまでの議論が戦わせられたのか。また、性的成熟度という面でも、「妊娠/出産」があくまで机上の空論となってしまうのではないかという疑問が残る。時間的に十分に議論し尽くせなかった面も否めない。議論がちょうどピークになったところで「時間切れ」となってしまう部分は、生徒の中で消化不良として残ってしまったのではないかと思う。

成果としては、1つのテーマに即して、多角的、多様な意見を自然に出すことができるようになった。その意見を尊重しつつ、自らの意見を構築するすべを身につけていたとも思う。感情的な意見の交換になりがちな『生命尊重』の活動の中でも、理論的に構築して相手と意見を戦わせる姿勢も身についた。目の前の議論を戦わせている相手との立場の違い、自分とは違った社会的立場、環境の人々との違いなど、多くの違いを、身をもって認識することがこの「道徳科」の「モラルジレンマ」の実践の中に瞬時に行うことができるという提案は、今後の「多様性」の研究と「道徳科」の研究をつなぐ可能性を探ることができた。

(引用文献)

1) 荒木紀幸(監修)「モラルジレンマ教材とする白熱討論の道徳授業=中学校・高等学校編」

道徳性発達研究会 編集 2013. 4. 23 明治図書
pp. 124~129. pp. 170~181.

(参考文献)

三浦摩利〈著〉「中学校道徳 自作資料集—生徒が
思わず語り合いたくなる 24 の話—」2014. 9. 11.
明治図書

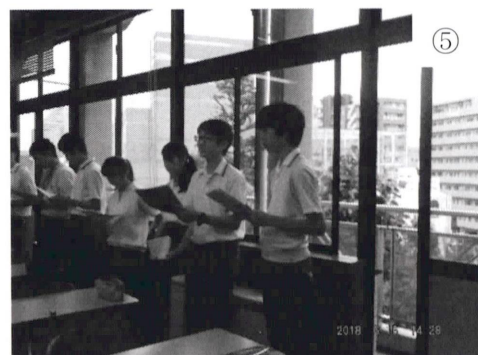
諸富祥彦〈編著〉「ほんもののエンカウンターで
道徳授業」中学校編 2014、明治図書

(資料) 実践でみられた子どもの姿

菊地圭子:『平成 30 年度東京学芸大学附属竹早幼
稚園・小学校・中学校研究紀要 学びを深める場
をつくる～自ら学びを深める子どもをめざして
～』「実践研究部会 人間〔道徳・総合・特活〕分
科会 中3の実践」 2019. 3 pp. 304-316.



- ①アイスブレイキングで道徳の授業への心と体の準備
- ②それぞれの立場で互いの意見を交流し自信を持って発言（設置すべきではない派）
- ③人数が多い文章グループもそれぞれ気のあった仲間と（設置すべきである派）



- ④友だちとの交流の後だからこそ自分の意見を堂々と述べる事ができる（設置すべきである派）
- ⑤少人数でも論理的思考を駆使しながらの発言で道徳的価値観も深められる（設置すべきではない派）